コロナ禍前後における短期大学生の学修成果に対する評価とは

―短期大学生調査結果経年比較―

○堺　完（大分大学）○宮里　翔大（桜美林大学）　山崎　慎一（桜美林大学）　黄　海玉（一般財団法人大学・短期大学基準協会）

①問題の所在

コロナ禍による授業方法等の学修環境の変化

- 2020-2021年度においては、対面授業実施が制限され、オンライン授業の増加や両方組み合わせた形での授業を展開
- 2022年度前期の授業では、多くの大学が対面式授業の実施割合をコロナ禍以前に戻すより取り組み。７割以上を対面授業とする予定とした大学等は全体の95.8%にのぼる。

（文部科学省『令和４年度前期の大学等における授業の実施方針等に関する調査』）

コロナ禍が学修成果などの学生の到達度実感にもたらした影響とは？

- 大学IRコンソーシアム（2021）：コロナ禍1年目に実施した2020年度調査結果について、1年生の能力に関しては、「人間関係の構築」、「協力して作業する」、「コミュニケーション力」、「プレゼンテーション力」が前年より低下する一方で、文書表現能力とコンピュータを扱う能力は増加。上級生も類似の傾向であるが、低下幅は1年生の結果に比べてわずか。
- 大学IRコンソーシアム（2022）：コロナ禍2年目に実施した2021年度調査結果では、対人関連の４つの能力はコロナ禍前の2019年度調査結果並に評価が戻る。

※他の学生調査においても何かしらのコロナの影響は示唆

②発表目的

- コロナ禍による学生の学修成果等への影響について、各種調査結果より確認
  - ➢ 課題対応に関連した能力はコロナ禍でも上昇（あまり影響を受けていない）
  - ➢ しかし、対人関連などの能力については行動制限の影響が見られる（ただし、2021年度は評価は改善傾向）

- 堺・宮里（2022）にて2020-2021年度卒業生調査結果を使って、コロナ禍の影響を受けた卒業生とそうでない卒業生とで、コロナ禍による学修成果等への影響を確認。しかし、4年制大学の学生調査結果とは異なり、コロナ禍前後で差は見られず。

⇒在学生を対象とした「短期大学調査」結果をもとに再度コロナ禍による短大教育への影響を検討

③方法

コロナ禍前後の教育による学修成果等の評価に違いが見られるか

➢短期大学に「2018-2019年度」もしくは「2020-2021年度」に在学し、短期大学生（在学生）調査に回答した学生。前者は在学時にほとんどコロナの影響を受けていないが、後者は入学から卒業までほぼコロナの影響を受けている。

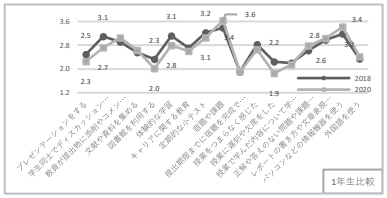
➢【1年生（2018年度）と1年生（2020年度）】及び【2年生（2019年度）と2年生（2021年度）】で結果を同学年同士で比較

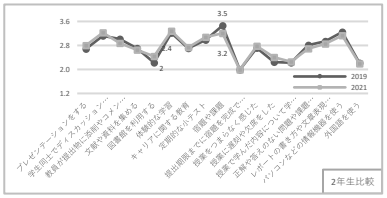
表：年度ごとの分野別学生数

調査年度	学年	教育系	健康系	その他	合計
2018	1年生	3941	1836	3180	8957
		44%	20%	36%	100%
2019	2年生	4412	1889	3369	9670
		46%	20%	34%	100%
2020	1年生	3973	1678	2597	8248
		48%	20%	32%	100%
2021	2年生	3483	1541	2608	7632
		46%	20%	24%	100%

④結果

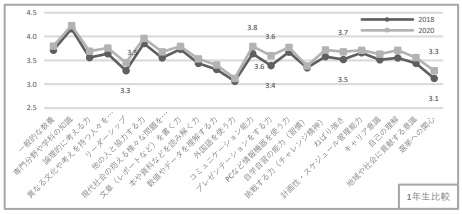
1A 同学年比較：授業における学修経験

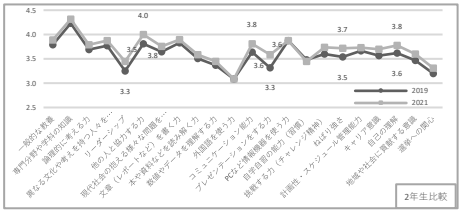




- 1年生比較では「プレゼンテーション」や「ディスカッション」、「図書館利用」、「体験的な学習」といった項目でコロナ禍前（2018）よりコロナ禍（2019）になってからの方が数値が低い。一方で「定期的な小テスト」「パソコンなど情報機器を使う」はコロナ禍（2019）後の方が高い傾向に。
- 2年生比較では、コロナ禍後（2021）の方が「図書館利用」はコロナ禍前（2019）より数値が低く、反対に「宿題や課題」は数値が高い。1年生比較で差が認められた項目は、差が縮まるなど回答傾向があまり変わらなくなっている。

1B 同学年比較：短期大学教育の学修成果





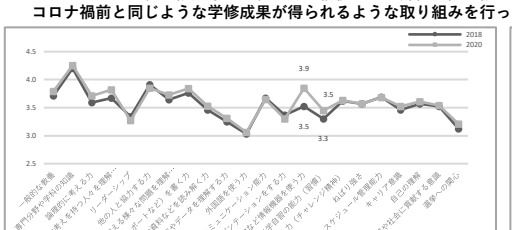
1年生比較及び2年生比較において、ほとんどの項目でコロナ禍後（2019,2021）の平均値の方が高い傾向に。特に前段の学修経験のところでコロナ禍後の方が低くなっていた「プレゼンテーション」をはじめとして「リーダシップ」や「コミュニケーション能力」など対人関連の項目の学修成果項目では、コロナ禍後の方が高い評価になるなど逆転現象が見られる。

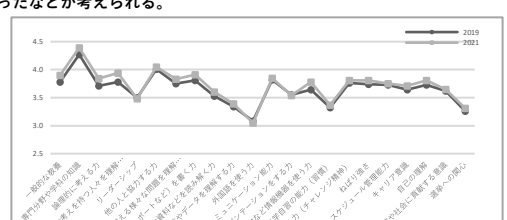
考察1：コロナ禍前後の同学年比較

- **学修経験においては、オンライン方式等など授業方法のあおりを受け、ディスカッションやプレゼンなど他者と学び合う学修経験や実習・実験など体験的な学修経験にやや差が見られる。その他に図書館等の対面でないと受けられない学修サービスなども違いが見られる。**
- **ただその一方で、学修成果では、コロナ禍後の方が評価が高い傾向にあり、様々な学修活動に制限がかかった中でも短大側がコロナ禍前と同じような学修成果が得られるような取り組みを行ったなどが考えられる。**

➡ **しかし、専門分野別で学修経験や活動も異なるので、もしかしたら学修成果に何らかの違いが見られる可能性がある。学修経験と学修成果の設問に関して、分野別比較を実施し、コロナ禍の影響に違いがあるか確認。**

2-a 同学年＋専門分野別比較［教育系］：授業における学修経験

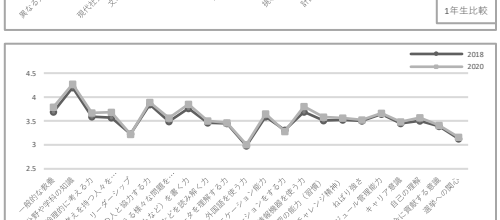


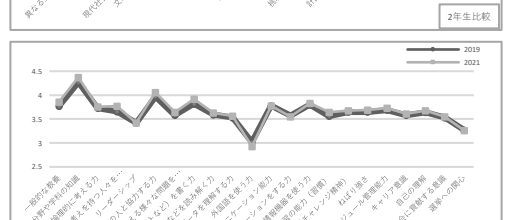


1年生比較では全体傾向と同じで、両専門分野ともに「プレゼンテーション」や「ディスカッション」、「図書館利用」がコロナ禍後（2020）の方がコロナ禍前（2018）より低い傾向にある。やや[教育系]の方が数値の低下が目立つ。「宿題や課題」はコロナ禍後（2020）の方がコロナ禍前（2018）より評価が高い。

専門分野間で異なる傾向を示している項目は「体験的な学習」であり、[教育系]ではコロナ禍後（2020）の方がコロナ禍前（2018）より評価が落ち込んでいるが、[健康系]では微減程度でありほとんどの影響がない。反対に「パソコン等情報機器の使用」は[教育系]ではコロナ禍後（2020）の方がコロナ禍前（2018）より評価が高くなっているが、[健康系]ではほとんど変わっていない。

2-b 同学年＋専門分野別比較［健康系］：授業における学修経験





2年生比較では、全体傾向と同じで、コロナ前後での数値差は縮小傾向。

[教育系]では全体的に1年生時より評価が持ち直しているとはいえ「ディスカッション」項目がコロナ禍後（2021）がコロナ禍前（2019）よりやや低いまま。[健康系]では「図書館利用」を除き、コロナ禍前後で大きな差が見られない。

※短大での授業においての活動状況について「よくあった（4）」～「まったくなかった（1）」の4件法で回答し、平均値を比較（±0.2以上差があった項目のみ値ラベル記載）。　短期大学において能力や知識等が「大きく増えた（5）」～「大きく減った（1）」の5件法で回答し、平均値を比較（±0.2以上差があった項目のみ値ラベル記載）。

考察2：コロナ禍前後の同学年比較

- **学修経験に関して、「プレゼンテーション」や「ディスカッション」など共通して評価を下げている部分もあれば、「体験的な学習」のように[教育系]では評価が下がったが、[健康系]では評価が下がっていないなど一部の項目で専門分野によってコロナ禍前後の影響が異なるところが垣間見える。**
- **学修成果に関しては、全体同様、専門分野別でもコロナ禍後（2020-2021）の方がコロナ禍前（2018-2019）より評価が高くなる傾向に。[教育系]では、ディスカッションやプレゼン、体験的な学習の学習機会が減った影響で、対人関連能力など評価が戻っていないところもある（反対にPCなど情報機器の操作能力は向上）**
  【なお、分野別学修成果の比較については紙面の都合上割愛し、zoom時の質疑応答時に補足資料として提示】。
- **学修経験、学修成果ともに、1年生（特に2020年度調査）はかなり評価の落ち込みや低下が見られたが、2年生の調査結果を見る限り、そこまでコロナの影響による大きな差はない様子。コロナ禍2年目に教育取り組みが改善した効果か？**

⑤今後の課題

- ✓　**対面やハイブリッドなどウィズ（アフター）コロナに対応した教育を受けた短期大学生の評価がどのように変わっているか、同様の分析を継続していく必要性**
- ✓　**学修経験や活動は、コロナの影響を受けているにもかかわらず、学修成果の評価にマイナスの影響が見られなかった背景**
  ⇒コロナ1年目と2年目で教育取り組みを改善したのか、現場の取り組みなどヒアリングの必要性（コロナ禍に対応した教育方法や学修支援方法など）

コロナ禍前後における短期大学生の学修成果に対する評価とは

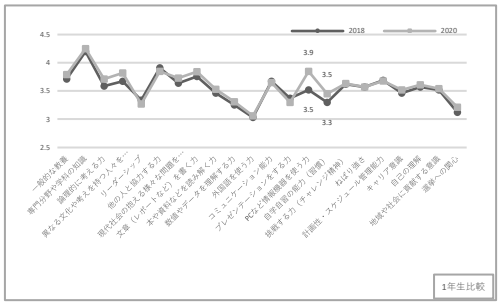
―短期大学生調査結果経年比較―

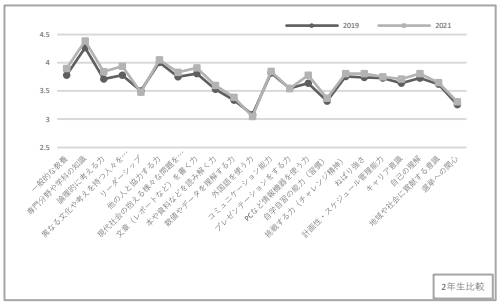
○堺　完（大分大学）○宮里　翔大（桜美林大学）　山崎　慎一（桜美林大学）　黄　海玉（一般財団法人大学・短期大学基準協会）

短期大学生調査の概要	参加状況		2018	2019	2020	2021
【調査目的】 ・短期大学で教育を受けている短期大学生に対して、短期大学の学修経験や学修成果、短期大学の満足度などを尋ね、教育成果の可視化に関する情報を得る 【調査対象】 大学・短期大学基準協会会員校全体に参加募集をかけ、調査を希望した短期大学 対象者の学年は主に1，2年生。一部3年制のところは3年生や専攻科生が回答者に含まれる。 【調査方法】質問紙調査（2020年度以降web調査も併用） 【実施時期】 ・9月上旬～12月中旬の約4か月間	参加短期大学数		62	79	67	73
	調査申込数		20821	23495	20302	20076
	有効回答数		18656	20849	17032	16575
	回答率		90％	89%	84%	83%
	内訳	1年生	8957	9722	8248	7885
		2年生	8532	9670	7648	7632
		その他	1167	1457	1136	1058

結果 3-A 同学年＋専門分野別比較[教育系]：短期大学教育の学修成果

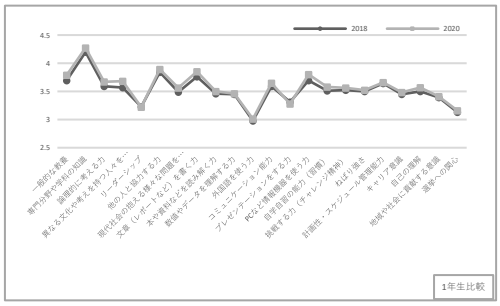
短大での授業においての活動状況について「よくあった（4）」～「まったくなかった（1）」の4件法で回答し、平均値を比較（±0.2以上差があった項目のみ値ラベル記載）。

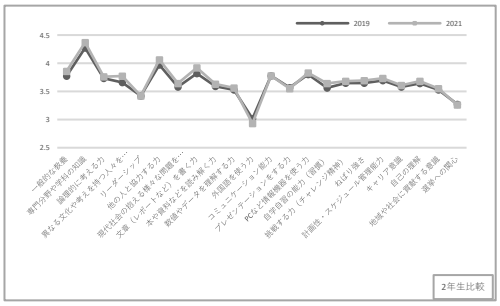




結果3-B 同学年＋専門分野別比較[健康系]：短期大学教育の学修成果

短期大学において能力や知識等が「大きく増えた（5）」～「大きく減った（1）」の5件法で回答し、平均値を比較（±0.2以上差があった項目のみ値ラベル記載）。





1年生比較において、[教育系]では、「他の人と協力する力」「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション」はコロナ禍後（2020）の方がコロナ前（2018）よりやや評価が低いものの、それ以外はコロナ禍後の方が概ね成果や能力の獲得実感が高い。そのうち、「PCなど情報機器を使う力」　コロナ禍後（2020）の方がコロナ前（2018）より極めて評価が高くなっている。

一方で[健康系]では、全体と同じでコロナ禍前（2018）よりコロナ禍後（2020）の方が概ね成果や能力の獲得実感が高くなっている項目が多いが、微増もしくはほとんど評価が変わらない項目が多い。

2年生比較において、全体傾向同様、コロナ禍前（2019）よりコロナ禍後（2021）の方が概ね成果に関する評価が高くなっている。ただ、専門分野別で傾向を見ても1年生比較ほど顕著な差が見られない。

引用・参考文献

- 堺・宮里・山崎・黄（2022）「卒業生からみたコロナ禍における短期大学教育に対する評価とは―2020-2021年度短期大学卒業生調査結果比較―」大学教育学会第44回大会（部会７）自由研究発表資料
- 大学IRコンソーシアム「コロナ禍の学生生活や習得能力への影響についての報告書」（2021）
  https://irnw.jp/images/20210916_%E5%85%AC%E9%96%8B%E7%94%A8v12_HP%E7%94%A8.pdf
- 大学IRコンソーシアム「「一年生調査2019年」「上級生調査2019年」基礎集計結果」（2020）
  https://irnw.jp/images/home/HP%E7%94%A8_%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E9%9B%86%E8%A8%882019_20201023%E6%94%B9%E8%A8%82.pdf
- 大学IRコンソーシアム「「一年生調査2019年」「上級生調査2019年」基礎集計結果」（2021）
  https://irnw.jp/images/%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E9%9B%86%E8%A8%882020_%E5%AD%A6%E8%AA%BFHP%E7%94%A8.pdf
- 大学IRコンソーシアム「「一年生調査2019年」「上級生調査2019年」基礎集計結果」（2022）
  https://irnw.jp/images/%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E9%9B%86%E8%A8%882020_%E5%AD%A6%E8%AA%BFHP%E7%94%A8.pdf
- 文部科学省「令和４年度前期の大学等における授業の実施方針等に関する調査」（2022）
  https://www.mext.go.jp/content/20220614-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf

補足資料